

## W-3-4

### 全体と部分、グループとメンバー、類と種：

チェコ語のHAVE、BELONG、BEの記述を通して

東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員 浅岡健志朗

kenshiro.asaoka1990@gmail.com

#### 1. はじめに

換喩と提喩は、それぞれ近接関係（特に全体部分関係）と包摂関係に基づく比喩であるとされる。全体部分関係と包摂関係には明らかな共通性（e.g. 推移性、非対称性）とともに相違性（e.g. 存在論的ステータス）があり、それを反映して換喩と提喩の関係についても複数の異なる立場が存在する（cf. 山泉 2005、森 2018）。

本発表は、換喩現象や提喩現象それ自体ではなく、これらの現象が基づく全体部分関係と包摂関係が言語化されるあり方を観察することを通して、この2つの関係の位置づけについての一つの見方を提示することを目的とする。具体的には、全体部分関係がグループ・メンバー関係を介して包摂関係と連続的に位置づけられ、それによってこれらの関係が推移的かつ非対称の関係一般の中である種のまとまりをなしていることを、チェコ語<sup>1</sup>の言語データによって示すを試みる。

#### 2. 全体部分関係と包摂関係の共通点と相違点：概念的な観点から

本節では、全体部分関係と包摂関係の共通点と相違点を、概念的な観点から考察する。一般に、全体部分関係は推移的かつ非対称的な関係であるとされる<sup>2</sup>。推移性と非対称性は、（少なくとも典型的な）全体部分関係を特徴づけるために必要ではあるが、十分ではない。推移性と非対称性は、全体部分関係だけでなく、様々な関係が満たす性質であるためである（例：「より大きい」「先祖である」）。その中には、後に見るように、例えば哺乳動物とクジラの間に成立する関係、すなわち包摂関係も含まれる。全体部分関係と包摂関係は、推移性と非対称性という性質をもつ点で類似しつつ、異なる種類の関係である。

これらの関係の相違点として、少なくとも、より上位の概念（以下、Aと呼ぶ）とより下位の概念（以下、Bと呼ぶ）がそれぞれどのような存在者であり得るかという点を挙げることができるだろう。ある木とその枝の間に成立する全体部分関係においては、AとBがともに具体的対象である。具体的対象とは、時空間の中に位置をもつ存在者である（倉田 2017）。例えば、ある木とその枝は、どちらも時空間的な位置を問題にすることができるような存在者である（「その木／枝はいつ、どこにあったのか？」は意味をなす問いである）ため、木と枝の間に成立する全体部分関係は、具体的対象の間の関係であると言える。一方で、「（一般に）木には枝がある」と言うとき、木と枝はそれぞれ抽象的対

<sup>1</sup> 印欧語族スラヴ語派西スラヴ語群。基本語順はSVO。チェコ語のデータの容認性判断は二人の母語話者（両者ともボヘミア地方出身、30代前半男性）によるものである。

<sup>2</sup> 推移性は、次のように規定される。すなわち、AがBに対して関係Rをもち、かつBがCに対して関係Rをもつならば、AがCに対して関係Rをもつと言えるとき、関係Rは推移的な関係である。例えば、木がある枝の全体であり、かつその枝がある枝先の全体であるという関係が成立するならば、その木はその枝先の全体であるという関係が成立する。このように言えるならば、AがBの全体であるという関係（全体部分関係）は推移的な関係である。

一方、非対称性は、次のように規定される。すなわち、AがBに対して関係Rをもち、かつ、BがAに対して関係Rをもたないとき、関係Rは非対称的な関係である。例えば、木がある枝の全体であるとき、その枝がその木の全体であるという関係は成立しない。このように言えるならば、AがBの全体であるという関係（すなわち全体部分関係）は非対称的な関係である。

象である。抽象的対象とは、少なくとも空間の中に位置を持たない存在者である (ibid.)。例えばタイプとしての木や枝は、空間的な位置を問題にすることができないような存在者である（「タイプとしての木や枝はどこにあるのか？」は意味をなす問いではない）。全体部分関係は、AとBがともに具体的対象か、あるいはともに抽象的対象あるような関係であると言えるだろう。これに対して、包摂関係においては、少なくともAが抽象的対象である。例えば、「BはAだ」という構文を用いて「クジラは哺乳動物だ」「このクジラはザトウクジラだ」と言うとき、Aはタイプとしての「哺乳動物」や「ザトウクジラ」であり、空間的な位置を問題にすることができない抽象的対象である。一方で、Bの「クジラ」と「このクジラ」はそれぞれ抽象的対象と具体的対象である。つまり、包摂関係は、抽象的対象と何らかの存在者（抽象的対象あるいは具体的対象）の間の関係であると言える。

- 全体部分関係： (a) A [具体的対象] – B [具体的対象] (木の事例と枝の事例)  
(b) A [抽象的対象] – B [抽象的対象] (木タイプと枝タイプ)
- 包摂関係： (c) A [抽象的対象] – B [抽象的対象] (哺乳動物タイプとクジラタイプ)  
(d) A [抽象的対象] – B [具体的対象] (ザトウクジラタイプとクジラの実例)

しかし、このような特徴づけでは、AとBがともに抽象的対象である場合（つまり(b)と(c)の場合）に、全体部分関係と包摂関係を区別することができない。これを区別するために、「Bが同時にAでもある」という関係が成立するかという基準を導入することができるだろう。全体部分関係においては、Bは同時にAでもあるという関係が成立しない（枝は木ではない）。それに対して、包摂関係では、Bは同時にAでもある（クジラは哺乳動物である）。以上のように、全体部分関係と包摂関係は、推移性と非対称性という性質を共有しつつ、関係に参加する対象の存在論的ステータスと、BがBであると同時にAでもあるかという点において異なるものと見ることができる。

ところで、先に述べたように、推移的かつ非対称的な関係は全体部分関係と包摂関係に限られるわけではなく、様々な関係がこの2つの性質を満たす。つまり、全体部分関係と包摂関係は、推移的かつ非対称的な関係一般のそれぞれ一事例である。そして、以上の見方においては、この2つの関係の間にこれ以上の繋がりがあることは示されていない。しかし、これらの関係が言語的に表現されるあり方を観察すると、全体部分関係と包摂関係が推移的かつ非対称的な関係一般の中で、ある種のまとまりをなしていることが示唆される。これがどのようなまとまりであるのかを、チェコ語の複数の構文の観察を通して示すことが以下の目的である。

### 3. 全体部分関係と包摂関係の連続性：言語的な観点から

本節では、全体部分関係と包摂関係が、グループ・メンバー関係と以下で呼ぶ関係を介して間接的に結びつき、これらの関係が家族的類似を成していることをチェコ語の言語事実を元に示すことを試みる。

#### 3.1. チェコ語のHAVE、BELONG、BE

チェコ語では、(1)のように二者（木とその枝）の間に成立する全体部分関係が、HAVE型動詞（所有者を主語、所有物を目的語として表現する動詞） *mít* （以下、単にHAVEと呼ぶ）によって表現されるが、一方でこの二者の関係はチェコ語のコピュラ  *být* （以下、単にBEと呼ぶ）によっては表現されない。逆に、包摂関係は、(2)のようにBEによって表現されるのに対してHAVEによっては表現されない。このことから、これら2つの関係は、チェコ語では明確に言語的に区別されているように見える。

- (1) a. Tenhle strom má dlouhé větve.  
this.tree.SG.NOM has long.branches.PL.ACC  
「この木は枝が長い」
- b. \*Dlouhé větve jsou tenhle strom.  
long.branches.PL.NOM are this.tree.SG.NOM  
「長い枝はこの木のだ」を意図。
- (2) a. \*Savec má velrybu.  
mammal.SG.NOM has whale.SG.ACC  
「哺乳類にはクジラがいる」を意図。
- b. Velryba je savec.  
whale.SG.NOM is mammal.SG.NOM  
「クジラは哺乳動物だ」
- (3) a. Dlouhé větve patří k tomuhle stromu.  
long.branches.PL.NOM belong to.this.tree  
「長い枝はこの木のだ」
- b. Velryba patří k savcům.  
whale.SG.NOM belongs to.mammals  
「クジラは哺乳動物に属する」

これに対して、BELONG型動詞（所有物を主語、所有者を斜格語として表現する動詞）*patřit*（以下、単にBELONGと呼ぶ）は、(3)に示すように全体部分関係と包摂関係の両方を表現する。これらの関係はそれぞれ推移的かつ非対称的な関係の一種であるが、BELONGは、推移的かつ非対称的な関係一般を表現する述語ではない（例えば、BELONGは「より大きい」「先祖である」などの関係を表現できない）。つまり、全体部分関係と包摂関係が、推移的かつ非対称的な関係一般の中で（BELONGのという単一の述語で表現されることを動機づけるような）ある種のまとまりをなしていることが示唆される。

### 3.2. 典型的な全体部分関係とグループ・メンバー関係

(4a)において、HAVEは師団とそれを構成する対象の関係を表現している。この関係は、推移的かつ非対称的な具体的対象間の関係であるという点で、(1a)に例示した木と枝の間に成立する全体部分関係と共通している。また、この関係は、(4b)に例示するように、BELONGによっても表現される。HAVEとBELONGのどちらによっても表現されうる関係であるという点でも、やはり木と枝の関係と並行的である（cf. (1a)と(3a)）。

- (4) a. Tahle divize má {dobrou jednotku / dobré vojáky / Petra}.  
this.division.SG.NOM has {good.troop.SG.ACC / good.soldiers.PL.ACC. / P.SG.ACC}  
「この師団には {良い部隊がある / 良い兵士たちがいる / ペトルがいる}」
- b. {Tahle jednotka / Ti dobří vojáci / Petr} patří k této divizi.  
{this.troop.SG.NOM / these.good.soldiers.PL.NOM / P.SG.NOM} belong(s) to.this.division  
「{この部隊 / これらの良い兵士たち / ペトル}はこの師団に属する」

ただし、木と枝の関係をBELONGで表現する(3a)が自然な発話となるのは、その枝がどの木のものであるのかということが問題になっている（例えば、地面に何本か枝が落ちていて、その枝がどの木のものなのかという質問に対して答えるという）文脈であり、枝が木のあるべき場所についている状況では不自然な表現となる。BELONGが単に二者間に全体部分関係が成立していることを表現しているのではなく、「B [部分] は、A [全体] の部分として位置づけられるようなものである」（つまり、「この枝はどんな枝か」というと、その木という全体の部分として位置づけられるような枝なのだ」ということを表現していると考えれば、部分がどの全体に属しているかが普通自明であるのような二者（木と枝、机と脚、カップと取っ手等々）の関係を表現する際に、上記のような状況でなければBELONGがなじまないことも自然に理解できる。

上に挙げたような二者の関係において、部分がどの全体に属しているかがふつう自明であるのは、その部分が、全体を構成する他の部分と空間的に連続しつつ、その全体の中で一定の空間的位置にあるという知識を我々が持っているためであると考えられる（枝が幹と連続しつつ、木の中

で一定の位置にあることを知らない人は、枝や木がどのような対象であるかを知っているとは言い難い)。このような意味で全体と部分が空間的な構造を成している場合には、その知識を利用して、ある対象がある全体の部分であることを判断することができる。そのために、木と枝のような全体と部分に関しては、(部分が全体から空間的に分離しているなどの理由で)部分がどの全体に属しているか分からないような状況でなければ、まさに対象がある全体の部分として位置づけられることを述べる表現であるBELONGが用いられにくいのだと考えられる。

これに対して、(4)のような全体(師団)とそれを構成する部分(部隊・兵士たち・ペトル)の関係を表現する際にはBELONGの使われ方に上のような制限はかからない。これらの対象に関しては(木と枝などとは異なり)部分と全体が一定の空間的構造をもつものであるという知識を我々が持っているとは言い難いだろう。師団を構成する各部分(部隊など)はそれぞれ他のいずれかの部分に必ずしも空間的に連続していないし、部分が全体の中で一定の空間的位置にあるとも言えない。このような全体と部分においては、部分がどの全体に属しているかが不明である状況が容易に想定できる。そして、こうした状況ではBELONGが問題なく使用できるのである。以下、木と枝のような二者が一定の空間的構造をもつ全体部分関係を典型的な全体部分関係、師団と部隊・兵士たち・ペトルのような二者が一定の空間的構造をもたない全体部分関係をグループ・メンバー関係と呼ぶ(cf. Gorska 2003, 2004)。

この意味でグループと呼べるものの中には、ひとまとまりのものとして単数形名詞で表現される対象(例:(4))と、同じ種類のものの集まりとして複数形名詞で表現されるもの(例:(5))がある。以下、グループのうち、前者を組織、後者を集団と呼ぶ。(5)に示されているように、集団・メンバー関係は、BELONGで表現される一方でHAVEでは表現されない。このことから、HAVEはひとまとまりの対象である全体[典型的な全体・組織]に関して、それがどのような部分を含むものであるかを表現する述語であることが窺える。他方、BELONGはある対象に関して、それがどのような全体[典型的な全体・組織・集団]の部分であることを表現する述語であると言えるだろう。このような相違点はあるものの、HAVEとBELONGは、全体とその部分として捉えられうる二者を前提に成立する関係を表現するという点で共通している。

- (5) a. \*Nejlepší vojáci této divize mají {Petra / tuhle jednotku}.  
best.soldiers.PL.NOM of.this.division have {P.SG.ACC / this.troop.SG.ACC}  
「この師団の最も優秀な兵士たちの中に、{ペトルがいる / この部隊がある}」を意図。
- b. {Petr / Tahle jednotka} patří k nejlepším vojákům této divize.  
{P.SG.NOM / this.troop.SG.NOM} belongs to.best.soldiers. of.this.division  
「{ペトル / この部隊}はこの師団の最も優秀な兵士たちの一員だ」

以上、全体部分関係は、二者が一定の空間的構造をもつかどうかで典型的な全体部分関係とグループメンバー関係に分かれ、グループ・メンバー関係は、全体がひとまとまりの対象であるか同じ種類のものの集まりであるかで組織・メンバー関係と集団・メンバー関係に分かれるという見方を提示した。これを踏まえ、次節では、集団・メンバー関係と包摂関係が共通の意味の基盤によって繋がっていることを示す。

### 3.3. グループ・メンバー関係と包摂関係

- (6) Petr patří k schopým lidem v té firmě.  
P.SG.NOM belongs to.efficient.people in.that.company  
「ペトルはその会社の中で有能な人たちに属する」

- (7) Petr je v té firmě schopný člověk.  
 P.SG.NOM is in.that.company efficient.person.SG.NOM  
 「ペトルはその会社の中では有能な人だ」
- (8) Petr patří k té firmě.  
 P.SG.NOM belongs to.that.company  
 「ペトルはその会社に属する」

(6)において、主語は「ペトル」という一人の人物を、述語に続く斜格語の複数形名詞は「複数の有能な人々」という集団を表現している。そして、前節までの議論が正しければ、これらの間に「B [部分 (メンバー)] は、A [全体 (集団)] の部分として位置づけられるようなものである」という関係、つまり「ペトルは、その会社における有能な人々の集団の部分であるような人物である」という関係が成立することがBELONGによって表現されている。ここで注目すべきなのは、複数形名詞が表す集団は、同じタイプの事例であるような複数の対象であるということである。例えば、「有能な人たち」とは、「有能な人」というタイプの事例である対象の集まりである。したがって、(6)が表現する内容「ペトルは、その会社における有能な人々の集団の部分であるような人物である」は、「ペトルは、その会社における有能な人タイプの事例である複数の対象の集まりのうちの一である」とも言い換えられるような内容であることになる。つまり、「ペトル」が「有能な人」タイプの複数の事例のうち、いずれか一つの事例と同一であるという内容である。

そして、この内容は、まさに(7)においてBEが表す包摂関係と共通のものである。この文においては、主語が「ペトル」という一人の人物を、もう一方の単数名詞が「有能な人」という一人の人物を表している。コピュラBEを述語とするこの文は、「ペトル」と「有能な人タイプ」に属するいずれかの事例との間に、同一性の関係が成立することを表現していると考えられる (Langacker 1991: 64-71)。まさに「ペトル」が「有能な人」タイプの複数の事例のうち、いずれか一つの事例と同一であるという内容である。

集団・メンバー関係と包摂関係は、「あるタイプの複数の事例」という共通の意味の基盤を持つることになる。(6)と(7)が異なるのは、共通の意味の基盤のうち、どの部分を明示的に言語化しているかという点である<sup>3</sup>。(6)はペトルと、(複数形名詞が表現する)有能な人タイプの事例である複数の人々という二者の間に、前者が後者とともに集団を構成するという関係を表現している。それに対して、(7)はペトルと、(単数名詞が表現する)有能な人タイプの事例であるいずれかの一人の人物の間に、前者が後者と同一であるという関係を表現している。

包摂関係と集団・メンバー関係は、上で述べたような共通の意味の基盤をもつという仕方で繋がっている。そして前述のように、集団・メンバー関係は、一定の空間的構造をもたない全体部分関係 (つまりグループ・メンバー関係) であるという共通性によって、組織・メンバー関係と結びついている。しかし、集団・メンバー関係と組織・メンバー関係の共通性はこれだけではない。このことを示すために、(6)と(8)を対照する。(6)において複数名詞が表現する集団は、場所句によって会社という組織に属することが表現されている。このペトルと会社の間組織・メンバー関係は、BELONGによって(8)のように表現される。(8)は、「ペトルは、その会社という組織の部分であるような人物である」という関係を表現している。*firma*「会社」という語の意味を知っていると言えるためには、これを構成する要素として複数の人間が関わっているということを知っている必要がある (このことを知らない話者はこの

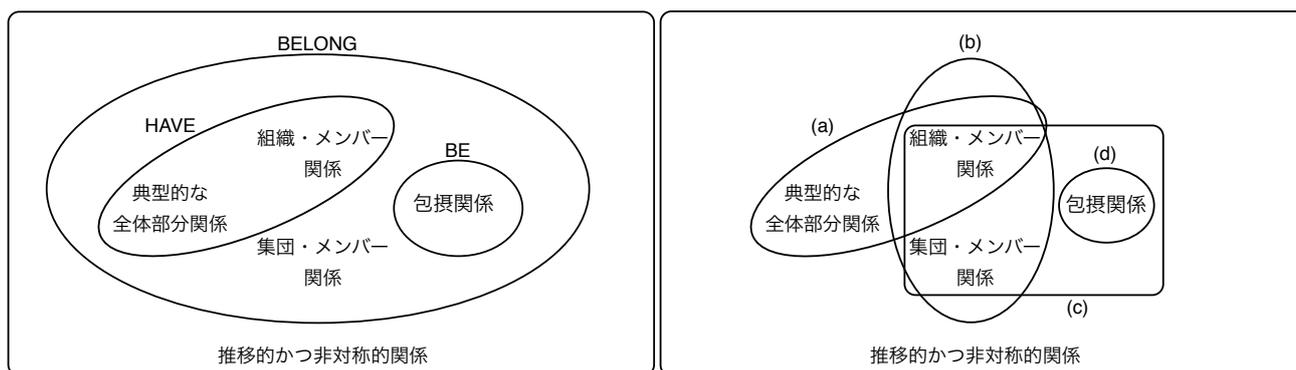
<sup>3</sup>ここでの「意味の基盤」と、そのうち「どの部分を明示的に言語化しているか」は、それぞれ認知文法における base と profile に対応する (Langacker 2008: 66-70)。

語を正しく使用することはできないだろう)。この知識をもとに、(8)は、「ペトルはその会社を構成する複数の人間の一人である」という内容として理解される。ここに、集団と組織のさらなる共通性を見出すことができる。つまり、集団はあるタイプに属する複数の事例であり、組織は、(言語的に明示されていない) 何らかのタイプ(会社の場合、例えば人間)の複数の事例をその意味に含んだひとまとまりの対象である。つまり、集団と組織にも、あるタイプに属する複数の事例という共通の意味の基盤があると考えられるということである。

集団・メンバー関係と組織・メンバー関係にはあるタイプの複数の事例が意味に参与するという共通性があることを確認した。そして最後に、組織・メンバー関係は、3.2節で述べたように、典型的な全体部分関係と(ひとまとまりの対象とその部分の関係であるという点で)密接に関連する概念である。このことは、HAVEで表現することが可能であるという振る舞いに現れていた(cf. (1a)と(4a))。

#### 4. おわりに

全体部分関係と包摂関係は、関係に参与する対象の存在論的ステータスにおいて異なるものの、ともに推移的かつ非対称的な関係の一例であるという共通点をもつ。しかし、両関係の繋がりにはこれに尽きるわけではない。チェコ語のHAVE、BELONG、BEの記述を通して示したように、全体部分関係と包摂関係はグループ・メンバー関係を介して家族的類似を示し、推移的かつ非対称的な関係一般の中でまとまりを成していると見ることができる。



(a) 全体がひとまとまりの対象 (b) 一定の空間的構造をもたない全体と部分  
(c) あるタイプと複数の事例という意味の基盤 (d) BがBであると同時にAでもある

図1 HAVE・BELONG・BEの表現範囲(左)と、全体部分関係と包摂関係の連続性(右)

#### 参考文献

Górska, Elżbieta. (2003) On parthood and taxonomy. *Studia Anglica Posnaniensia: International Review of English Studies*. 39, 103-111. / Górska, Elżbieta. (2004) Reference-point organization of collections. In Lewandowska-Tomaszczyk, Barbara and Alina Kwiatkowska (eds). *Imagery in Language. Festschrift In Honour of Professor Ronald W. Langacker*, Frankfurt/Main: Peter Lang. / 倉田剛 (2017) 『現代存在論講義 I』新曜社. / Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar: Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press. / Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press. / 森雄一 (2018) 「「全体—部分」「類—種」の意味論と修辞論」『日本エドワード・サピア協会年報』32, 1-13. / 山泉実 (2005) 「シネクドキの認知意味論へ向けて—類によるシネクドキ再考」山梨正明ほか(編)『認知言語学論考No.4』ひつじ書房. / Tversky, Barbara. (1990) 'Where parthood and taxonomies meet'. Tsohatzidis, S. L. (ed.) *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*. 334-344. London: Routledge.